Journal of Animal-Assisted Education and Therapy

Vol.16, No.1・2 (2025)

CONTENTS

Original Report

Influences of dog accompaniment on helping behavior: A vignette-based study
Nose I, Masamoto K, Hayashi M, Kakinuma M ····· 1

Abstracts of the 17th Annual Meeting of the Asian Society for Animal-assisted Education and Therapy (Sep. 14–15, 2024)

How can living with a cat change the lives of bedridden elderly people?
Tsuchida H ····· 10

The socio-psychological effects of companion animals (dogs) on elderly caregivers
Kawahara M, Yasahiro K ····· 12

Psychological and physiological effects of animal-considerable interaction on humans
Tsuchida A, Uchiyama K, Koizumi R ····· 14

The animal assisted education at zoos — The objectives of early childhood education at a zoo: differences in zookeepers' and kindergarten teachers' perspectives
Sano Y ····· 16

The implementation and usefulness of horse therapy for school absentee students, their parents, and teachers
Mitsunaga M ····· 18

Effectiveness of a Horse Coaching Program: A Qualitative Analysis of Awareness Experiences within the Program
Yashiro K, Yamagami T, Yabuuchi N, Yasuno M, Yokogawa S ····· 20

A study on the social acceptance of dogs: The influence of dog ownership experience and preferences
Sukegawa T, Nose I ····· 22

Submission Guidelines

動物介在教育・療法学雑誌

第 16 巻　第 1・2 号（2025 年）

目　　次

原著

犬の同伴が援助行動に及ぼす影響：場面想定法による検討
野瀬　出・政本　香・林　幹也・柿沼美紀……1

第 17 回動物介在教育・療法学会学術大会発表要旨（2024.9.14-15）

猫との暮らしは寝たきり生活の高齢者にどのような変化をもたらすか
土田浩生……10

コンパニオン・アニマル（イヌ）が高齢飼育者に与える社会心理学的効果について
河原真衣・八城　薫……12

動物に配慮したふれあいがふれあい者に与える心理的生理的影響について
土田あさみ・内山和聡・小泉　楽……14

動物園における動物介在教育―動物園職員と保育教員の認識に着目して―
佐野葉子……16

不登校生徒とその保護者，教員らへのホースセラピーの実施と有用性について
光永雅子……18

ホースコーチングプログラムの有効性―プログラムにおける気づきの体験分析―
八城　薫・山上高生・薮内直子・安野舞子・横川滋章……20

イヌの社会受容に関する基礎的調査―飼育経験および好悪感による影響―
助川東悟・野瀬　出……22

投稿規程……（後付）

原著

犬の同伴が援助行動に及ぼす影響：場面想定法による検討

野瀬　出[1)*]・政本　香[2)]・林　幹也[3)]・柿沼美紀[1)]

1）日本獣医生命科学大学獣医学部
2）松山東雲女子大学人文科学部
3）明星大学心理学部

(2025 年 1 月 23 日受付 /2025 年 3 月 19 日受理)

Influences of dog accompaniment on helping behavior: A vignette-based study

Nose Izuru[1)*], Masamoto Kaori[2)], Hayashi Mikiya[3)], Kakinuma Miki[1)]

1）Faculty of Veterinary Medicine, Nippon Veterinary and Life Science University
2）Faculty of Human Sciences, Matsuyama Shinonome College
3）Faculty of Psychology, Meisei University

(Received January 23, 2025/Accepted March 19, 2025)

Abstract : This study examined the influence of dog accompaniment on helping behavior using the vignette method. A web-based survey was administered to 282 dog and 262 non-dog owners. The participants were presented with scenarios depicting three conditions (a person who was alone, with a child, and with a dog) in a park setting, involving two helping situations (giving directions or helping to find keys), and rated their likelihood of giving or receiving help in each scenario. The analysis showed that individuals who owned dogs were more likely to help dog-accompanied people, and even non-dog owners tended to help dog-accompanied people in high-distress situations. Furthermore, positive attitudes towards dogs facilitated helping behavior towards dog-accompanied persons, particularly in high-distress situations. On the other hand, in the case of being helped, the influence of dog ownership and attitudes towards dogs was limited. These findings suggest that the social facilitation effects of dog accompaniment may emerge from the interactions of these factors.

Key words : dog accompaniment, helping behavior, vignette method

J. Anim. Edu. Ther. 16: 1-9，2025

緒　言

これまでに実施された動物介在介入に関する研究から，犬の介在により社会的効果が得られることが示されている（Haughie et al 1992; Fick 1993; Bernstein et al 2000; Marr et al 2000; Sams et al 2006; Tissen et al 2007）。例えば，教室に犬を入れると児童がグループ活動をする時間が増加，攻撃行動が減少して，より落ち着いた教育環境が整うことが報告されている（Kotrschal & Ortbauer 2003）。また，精神科病棟における研究では，犬を入れることで患者間のコミュニケーションが活発となり，その効果は直接犬と関わらなかった患者にも及んでいた（Haughie et al 1992）。

日常場面においても，人が犬を連れていることよって社会的相互作用が増加することが確認されている。高齢者が犬と散歩をすることで，他者との会話のきっかけが生まれ，その会話の中心には犬に関する話題が多く見られるようになった（Rogers et al 1993）。また，介助犬を連れた成人の車椅子使用者に関する研究

* 連絡先：inose@nvlu.ac.jp（〒 180-8602　東京都武蔵野市境南町 1-7-1　日本獣医生命科学大学 比較発達心理学研究室）

では，介助犬がいる場合に，通行人からの微笑みや会話の頻度が増加することが示されている（Eddy et al 1998）。同様に，車椅子を使用する子どもを対象とした研究においても，介助犬の存在により通行人からの視線，会話，接触，微笑みといった社会的反応が増えることが確認されている（Mader et al 1989）。このように犬は社会的潤滑油として機能し，人々の言語的・非言語的コミュニケーションを活性化させることが示されている。

犬の同伴による社会的効果に関連する要因についても検討されている。ゴールデン・レトリーバーの子犬が 10 週齢から 33 週齢になるまでの期間に，通行人の子犬に対する反応を記録した結果，子犬が若いほど接近する人が多く，特に女性からの接近が顕著であった（Fridlund and MacDonald 1998）。また，犬を連れていると見知らぬ他者との社会的交流が増加する。犬を連れている人の服装がだらしないよりも，きちんとしているほうが社会的交流は増えるが，どちらの服装であっても犬連れの効果が認められた（McNicholas and Collis 2000）。Wells（2004）の研究では女性が犬を連れて歩くと，手ぶら，もしくはぬいぐるみや植物を持って歩くよりも，通行人からの反応（視線，微笑み，会話）が多かった。犬種に関してはロットワイラーよりもラブラドール・レトリーバーにおいて反応が多く，通行人の性別が男性よりも女性において，単独よりもペアで歩いている場合に反応が多くなっていた。

本研究では社会的行動の一つである援助行動に焦点をあてる。援助行動とは他者が困難な状況にある時に，その困難から抜け出すために他者に力を貸す行為である。挨拶や会話のような一般的な社会的相互作用と異なり援助コストが発生するため，行動を促すことがより困難である。Guéguen and Cicotti（2008）は，犬の同伴が援助行動に及ぼす影響について検討している。公共場面において，犬を連れた見知らぬ他者からの援助要請（バス乗車料金を借りたい，落とした硬貨を拾ってほしい）に応じるかどうかを調べた。その結果，犬を連れているほうが，連れていない場合よりも援助を受ける頻度が多くなっていた（ただし，著者の Guéguen が発表した多くの論文においてデータの信頼性が問題視されており（例えば，Darnon and Klein 2019; Yamamoto and Ohtsubo 2020; O'Grady 2017），当該論文についても精査が必要である）。

これまでに述べた先行研究では，研究方法として主に行動観察法が用いられてきた。しかし，この方法では犬と接触するため，犬に対してアレルギー反応を示す者や恐怖感情が強い者は研究に参加することが難しく，対象者の偏りが生じている可能性がある。また，実験室以外の公共場面において実施されているため実施環境の統制が十分とは言えず，対照条件が設けられていないことが多い。本研究では，これらの問題を改善するために場面想定法を用いる。場面想定法とは，対象者に特定の具体的な場面を呈示し，その場面が実際に自分自身に生じたと仮定し，その事態に対する対象者の判断を求める方法であり，実際に体験させることが困難であったり，倫理的な問題が生じたりする場合に特に有効である（参考として，相沢 2010）。場面想定法を用いることで，犬が苦手な人々も対象に含めて研究を実施することができる。また，複数の場面を呈示して評価を求めることで，様々な要因が及ぼす影響を同一の条件下で比較することが可能となる。援助行動の生起を規定する要因として，援助者の個人的要因（パーソナリティ特性，社会的立場等），被援助者の個人的要因（外見的特徴，援助要請の仕方等），および状況的要因（傍観者の存在，状況の曖昧さ等）があげられる（山際・堀 1991; 高木 1997）。どの要因が援助行動の促進と関連するのかを検討するには，場面想定法が適している。

本研究の目的は，複数の場面における援助行動について場面想定法を用いて調査を行い，犬の同伴者への援助行動に影響を及ぼす要因を明らかにすることである。特に犬の飼育経験や援助内容，犬に対する好悪感が援助行動にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。さらに犬の同伴者に対する援助場面に加えて，犬の同伴者からの被援助場面についても設定し，両場面における心理過程について比較検討を行った。

方　法

1.　調査対象者

日本在住の 18 歳から 65 歳の成人を対象に Web 調査を実施した。データ収集は調査会社（クロス・マーケティング）に依頼した。対象者の条件は，現在犬を飼育している人，もしくは犬の飼育経験がない人とし，過去に犬の飼育経験があるが現在飼育していない人は対象から除外した。データ収集の際には，犬の飼育経験の有無ごとの人数がそれぞれ 300 名（計 600 名）になるように調整した。調査期間は 2019 年 9 月 2 日から 3 日であった。参加者はアンケートに回答することで，調査会社から商品券等に交換できるポイントを得ることができた。Web 画面上で調査内容やデータの取り扱い方等について文章による説明を行い，調査への参加に関する同意を得た。調査は無記名により行われ，個人を特定できる情報は取得しなかった。

2.　調査手続き

援助行動に関して，場面想定法による調査を実施した。例えば「公園に犬を連れている人（X さん）がい

ました。X さんは道に迷って，同じ場所をウロウロしています。あなたは X さんに道を教えてあげますか？」という質問文に対して，5 段階（1 全くそう思わない，2 そう思わない，3 どちらでもない，4 そう思う，5 非常にそう思う）で評定を求めた。質問文は，3 名の人物（一人で歩いている人，子どもを連れている人，犬を連れている人），2 種類の援助内容（道案内，鍵拾い），および 2 種類の場面（援助場面，被援助場面）の組み合わせにより構成されていた（計 12 項目，資料参照）。援助内容の道案内は「道に迷って，同じ場所をウロウロしている人に道を教える」，鍵拾いは「排水溝に落とした鍵を取り出すために重いフタを持ち上げるのを手伝う」状況を設定している 。また，援助場面では回答者が登場人物に対して援助すると思うか，被援助場面では登場人物が回答者に対して援助すると思うかについて評定を求めた。質問項目は，先行研究（中川・横田・中西，2015）を参考にして作成した。

援助行動の質問に加えて，質問文に登場する人物の印象評定，犬と子どもに対する好悪感，犬の飼育経験，自分が犬好きであることの認識，およびデモグラフィック特性（年齢，性別，居住地）に関する質問にも回答を求めた。人物の印象評定は「親しみやすいか－親しみにくいか」「話しかけやすいか－話しかけにくいか」「感じが良いか－感じが悪いか」の 3 項目に対して 5 段階尺度（SD 法）による評定を求めた。犬と子どもに対する好悪感は，一般的な犬や子どもが好きかどうかを 5 段階（1 全くそう思わない，2 そう思わない，3 どちらでもない，4 そう思う，5 非常にそう思う）で評定を求めた。自分が犬好きであることの認識は，「あなたは周りの人から“犬好き”だと思われていますか」，「あなたは他の人から“犬好きだね”と言われたら，嬉しいですか」，「あなたは自己紹介やなじみの無い人との会話の中で，自分が“犬好き”であることを伝えますか」の 3 項目について 5 段階尺度による回答を求めた。また回答の信頼性を確認するため「この質問には，“どちらでもない”を選択してください」という項目を設けた。

3.　統計解析

統計解析には R（ver.4.4.2，https://www.r-project.org/）と anovakun（ver.4.8.9，https://riseki.cloudfree.jp/）を用い，分散分析を実施した。球面性の検定（Mendoza）を行い，球面性の仮定が成り立たない場合には ε による自由度の調整（Huynh-Feldt）を行った。多重比較を実施する際には Shaffer の方法を用いた。

結　果

1.　飼い主群・非飼い主群の特性

調査会社により 600 名からのデータが収集された。「この質問には，“どちらでもない”を選択してください」という項目において，その回答を選んでない場合はデータの信頼性が低いと考えられるため分析対象から除外した。最終的な分析データには，犬の飼育経験者 282 名（男性 167 名，女性 115 名，19 ～ 65 歳，平均年齢 49.6 歳，SD 10.6）および非飼育経験者 262 名（男性 133 名，女性 129 名，19 ～ 65 歳，平均年齢 48.0 歳，SD 10.8）の計 544 名が含まれていた。

犬と子どもに対する好悪感の平均評定値を Table 1 に示した。得点が高いほど，対象を「好き」であることを示す。好悪感評定値について，群（飼い主・非飼い主）×対象（犬・子ども）の 2 要因の分散分析を実施した結果，交互作用が有意であった（$F(1,542)=68.46$，$p<.001$，$\eta_p^2=.02$）。下位検定（単純主効果検定および多重比較）の結果，犬の好悪感評定値は非飼い主群よりも飼い主群において高かった（$p<.001$）。また飼い主群においては，子どもよりも犬の好悪感評定値が高くなっていた（$p<.001$）。

質問文に登場する人物の印象評定については 3 項目の平均評定値を算出した（Table 2）。得点が高いほど，良い印象を抱いていることを示す。印象評定値に対して，群（飼い主・非飼い主）×人物（一人・犬連れ・子連れ）の 2 要因の分散分析を実施した結果，交互作用が有意であった（$F(1.84,997.61)=32.45$，$p<.001$，$\eta_p^2=.05$）。単純主効果の検定を実施したところ，犬連れに対する印象評定値が，非飼い主群よりも飼い主群において高くなっていた。また多重比較の結果，飼い主群においては犬連れ，子連れ，一人の順に印象評定値が高く（$p<.05$），非飼い主群においては子連れ，犬連れ，一人の順に印象評定値が高くなっ

Table 1　犬・子どもに対する平均好悪感評定値（SD）

群	犬	子ども
飼い主群	4.29 (0.69)	3.40 (0.95)
非飼い主群	3.14 (1.09)	3.24 (0.97)

Table 2　登場人物に対する平均印象評定値（SD）

群	一人	犬連れ	子連れ
飼い主群	2.64 (0.56)	3.54 (0.66)	3.30 (0.68)
非飼い主群	2.63 (0.57)	3.06 (0.67)	3.27 (0.66)

ていた（p<.05）。

2.　援助行動の評定傾向

最初に援助行動の全体的な評定傾向について把握するため，各群における援助場面ごとの平均評定値を算出した（Table 3）。得点が高いほど援助する（援助場面），もしくは援助してもらえる（被援助場面）と考えていることを示す。群（飼い主・非飼い主）×場面（援助・被援助）の 2 要因の分散分析を実施した結果，交互作用が有意であった（$F(1,542)=4.87$，$p<.05$，$\eta_p^2=.01$）。交互作用について下位検定を実施した結果，飼い主群における場面の単純主効果（$p<.001$，$\eta_p^2=.06$），非飼い主群における場面の単純主効果（$p<.001$，$\eta_p^2=.02$），援助場面における群の単純主効果（$p<.001$，$\eta_p^2=.46$），被援助場面における群の単純主効果（$p<.001$，$\eta_p^2=.30$）がそれぞれ有意であった。両場面において飼い主の評定値が非飼い主よりも高く，両群において援助場面の評定値が被援助場面の評定値よりも高くなっていたが，両群の差は被援助場面よりも援助場面においてより大きかった。

Table 3　群・場面ごとの平均援助行動評定値（SD）

群	援助場面	被援助場面
飼い主群	3.67 (0.64)	3.03 (0.67)
非飼い主群	3.31 (0.79)	2.81 (0.72)

各群・各場面における，登場人物および援助内容ごとの平均評定値を Figure 1A ～ D に示した。飼い主群・援助場面（Figure 1A）の援助行動評定値に対して，人物（一人・犬連れ・子連れ）×援助内容（道案内・鍵拾い）の 2 要因の分散分析を実施した結果，人物の主効果が有意であった（$F(1.98,555.44)=9.40$，$p<.001$，$\eta_p^2=.03$）。多重比較の結果，犬連れおよび子連れの人物に対する評定値が一人の人物に対するそれよりも高くなっていた（p<.05）。

非飼い主群・援助場面（Figure 1B）の援助行動評定値に対して，人物×援助内容の 2 要因の分散分析を実施した結果，人物と援助内容の交互作用が有意であった（$F(2,522)=16.13$，$p<.001$，$\eta_p^2=.05$）。下位検定の結果，道案内においては子連れの人物に対する評定値が一人・犬連れよりも高く，鍵拾いにおいては犬連れ・子連れの人物に対する評定値が一人よりも高くなっていた（p<.05）。また，犬連れの人物において，道案内よりも鍵拾いの評定値が高くなっていた（p<.001）。

飼い主群・被援助場面（Figure 1C）の援助行動評定値に対して，人物×内容の 2 要因の分散分析を実

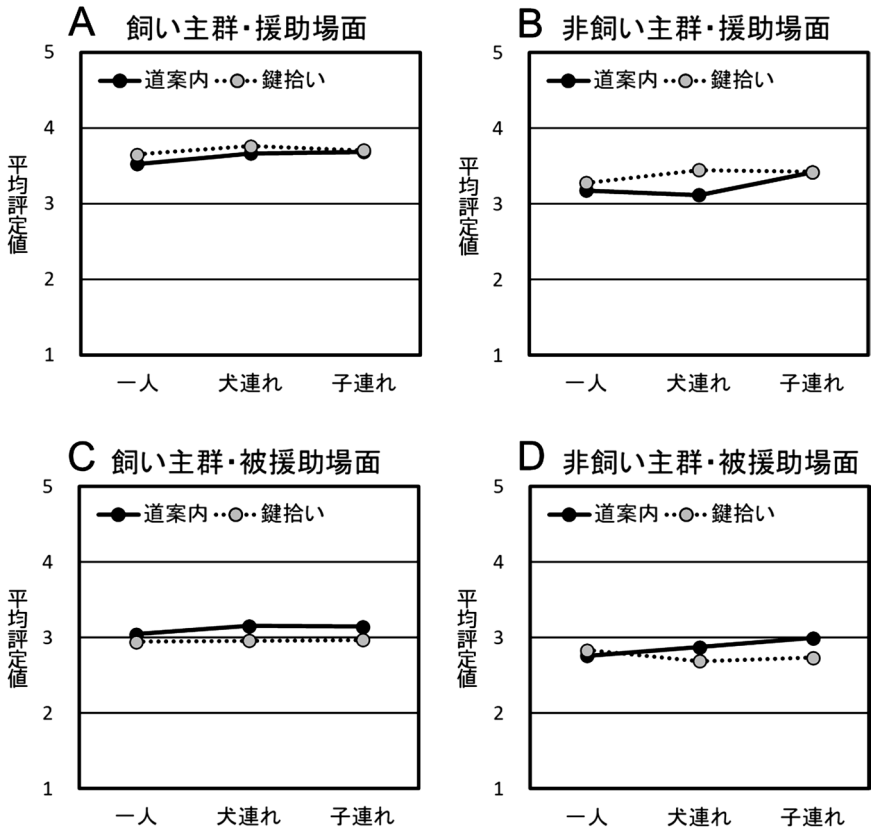


Figure 1　各群・場面における平均援助行動評定値

施した結果，援助内容の主効果が有意であった（$F(1,281)=15.62$，$p<.001$，$\eta_p^2=.05$）。鍵拾いよりも道案内における評定値が高くなっていた。

非飼い主群・被援助場面（Figure 1D）の援助行動評定値に対して，人物×内容の2要因の分散分析を実施した結果，人物と援助内容の交互作用が有意であった（$F(1.96,512.84)=13.56$，$p<.001$，$\eta_p^2=.05$）。下位検定の結果，道案内においては一人，犬連れ，子連れの順に評定値が高く，鍵拾いにおいては一人の人物に対する評定値が犬連れ・子連れよりも高くなっていた（$p<.05$）。また，犬連れと子連れの人物において，鍵拾いよりも道案内の評定値が高くなっていた（$p<.05$）。

3.　援助行動評定と好悪感との関係

犬への好悪感評定値（1～5）ごとの人数をFigure 2に示す。好悪感1・2には飼い主群がほとんど含まれておらず，逆に好悪感5においては非飼い主の人数が少なくなっていた。犬の飼育経験による影響を除外するため非飼い主群のデータのみを用い，各好悪感評定値における犬連れの人物に対する援助行動の平均評定値を算出した（Figure 3）。

犬連れ・援助場面（Figure 3A）の援助行動評定値に対して，犬への好悪感（1～5）×援助内容（道案内・鍵拾い）の2要因の分散分析を実施した結果，好悪感と援助内容の交互作用が有意であった（$F(4,257)=2.56$，$p<.05$，$\eta_p^2=.03$）。下位検定の結果，好悪感2～4において道案内よりも鍵拾いの評定値が高くなっていた（$p<.01$）。また，道案内では好悪感1よりも好悪感4・5，好悪感2よりも好悪感3～5，好悪感3よりも好悪感5において評定値が高くなっていた（$p<.05$）。鍵拾いでは好悪感1よりも好悪感3～5において評定値が高くなっていた（$p<.05$）。

犬連れ・被援助場面（Figure 3B）の援助行動評定値に対して，犬への好悪感×援助内容の2要因の分散分析を実施した結果，好悪感の主効果（$F(4,257)=3.69$，$p<.01$，$\eta_p^2=.05$）と援助内容の主効果（$F(1,257)=4.28$，$p<.05$，$\eta_p^2=.01$）が有意であった。援助内容については，鍵拾いよりも道案内の評定値が高くなっていた。好悪感については，好悪感1・5よりも好悪感4において評定値が高くなっていた（$p<.05$）

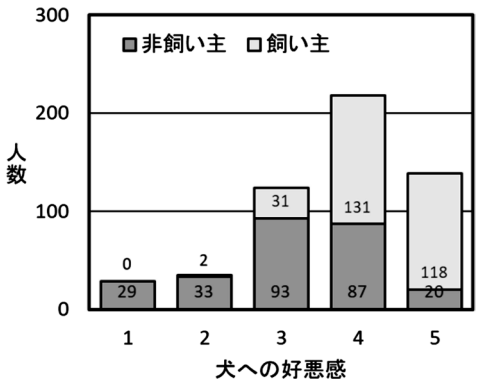


Figure 2　犬への好悪感評定値ごとの人数分布

考　察

本研究では，場面想定法を用いて犬の同伴が援助行動に及ぼす影響について検討した。データ解析の結果，犬を連れている人物への援助行動は，回答者の犬の飼育経験の有無や犬に対する好悪感によって影響を受けていることが明らかになった。

まず，飼い主群と非飼い主群の特性について調べたところ，飼い主群は非飼い主群よりも一般的な犬に対して好意的で，犬を連れた登場人物の印象が良かった（Table 1, 2）。また非飼い主群は犬連れよりも子連れの人物に対して印象が良かったが，飼い主群では子連れよりも犬連れの人物に対する印象が良かった。犬の飼育経験があることによって，犬やその同伴者に対する感情や印象が肯定的になることが確認された。

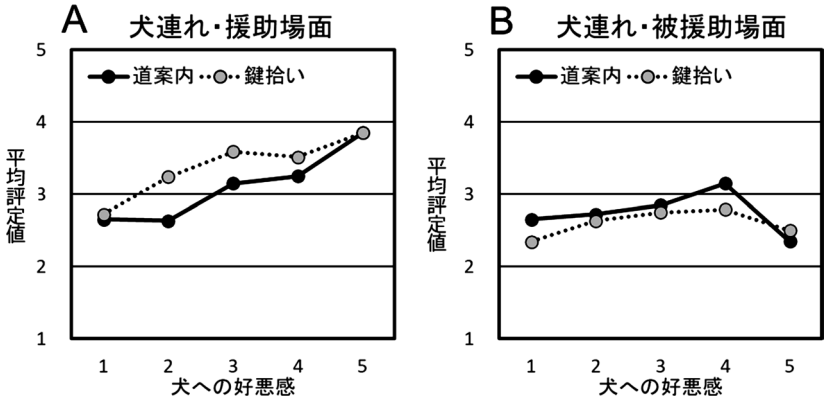


Figure 3　非飼い主群における犬への好悪感と援助行動評定値との関係

援助行動評定の全般的な傾向として，援助場面（回答者が登場人物を助ける）のほうが，被援助場面（回答者が登場人物に助けられる）よりも評定値が高くなっていた（Table 3）。回答者は困難な状況にある他者を援助することには積極的であるが，他者からの援助は期待できないと捉える傾向があることを示している。この傾向は先行研究とも一致しており，被援助者は他者の援助意欲を実際よりも低く見積もり，他者が援助要請を迷惑に感じていると捉える傾向があることが報告されている（Zhao and Epley 2022）。また，飼い主群の評定値は，非飼い主群よりも高くなっていた（Table 3）。これは援助場面・被援助場面ともに認められており，質問文中に犬が登場することで，質問項目全体に対して肯定的な態度が形成された可能性がある。

援助場面の評定について条件別に分析した結果，飼い主群，非飼い主群ともに，対象が一人よりも子連れの場合に評定値が高くなっていた（Figure 1AB）。これは対象が子どもを連れていると自分で問題を解決することが難しくなるため，その人を援助しようとする意欲が高くなると考えられる。飼育経験による違いが認められ，飼い主群では犬連れの人と子連れの人に対する評定値が同程度であり（Figure 1A），犬を子どもに近い存在として捉えている可能性が示唆された。一方，非飼い主群では，犬連れの人物への援助行動評定は援助内容によって異なっており，道案内よりも鍵拾いにおいて評定値が高くなっていた（Figure 1B）。鍵拾いでは排水口の重いフタを上げなければならないため，道案内よりも困窮度がより高い（問題解決のために労力を要する）状況と言える。犬に不慣れな非飼い主群は，犬連れの人物の困窮度が低ければ積極的に助けようとしないが，困窮度が高い場合には助ける傾向にあることを示している。

被援助場面の評定について条件別に分析した結果，飼い主群においてはどの人物に対しても道案内よりも鍵拾いの評定値が低くなっており（Figure 1C），援助者の負担が大きい鍵拾いは，相手の状況に関わらず援助を受けることが難しいと捉えていた。犬の同伴による援助行動評定への影響は認められなかった。非飼い主群では犬連れと子連れの人物において，道案内よりも鍵拾いの評定値が低くなっていた（Figure 1D）。犬や子どもを連れていることは他者を援助する際に阻害要因となり（援助の邪魔になる），特に鍵拾いでは対象からの援助は期待できないと捉えていた。

非飼い主群のデータについて，犬への好悪感と犬連れの人物に対する援助評定との関連について分析した結果，援助場面では犬に好意的である程，援助行動の評価値が増加していた（Figure 3A）。また好悪感が中間的（評定値 2 ～ 4）な場合に，道案内よりも鍵拾いの援助行動評価値が高かった。これらの結果は，犬をかなり苦手とする回答者は犬連れの人物を積極的に援助しようとせず，犬をかなり好きな人は援助をする可能性が高いこと，またその犬に対する好悪感が中間的な回答者においては人物の困窮度が高ければ助ける傾向にあることを示している。被援助場面においては，道案内よりも鍵拾いにおいて評定値が低くなる傾向が認められた（Figure 3B）。カギ拾いは援助者の負荷が大きいため，援助をより受けにくいと捉えていた。援助場面では犬への好悪感が高くなると援助行動評定も増加していたが，被援助場面においてはそのような傾向は認められなかった。

これらの結果をまとめると，以下のことが示唆される。1）犬の飼育経験があると，犬同伴者に対する援助行動が子連れに対するそれと同程度に促進される。2）犬の飼育経験がない人では，被援助者の困窮度が高い場合には犬連れを子連れと同程度に援助する傾向がある。3）犬に対して好意的であるほど犬同伴者への援助行動が促進され，特に困窮度が高ければ促進されやすい。4）被援助場面においては，犬の飼育経験があったり，犬に対して好意的であっても犬同伴者からの援助を受けやすくなるとは捉えていない。

援助行動の生起を規定する要因として，援助者の個人的要因，被援助者の個人的要因，状況的要因があげられる（山際・堀 1991; 高木 1997）。本研究の援助場面においては，回答者の犬の飼育経験や犬への好悪感が援助者の個人的要因，登場人物が犬連れかどうかは被援助者の個人的要因，援助内容は状況的要因に相当する。本研究の結果は，犬同伴者に対する援助行動がそれら要因の相互作用により生起するかどうかが決まることを示している。つまり，被援助者の個人的要因（犬の同伴）と援助者の個人的要因（犬の飼育経験，犬に対する好意的感情）がマッチしていれば援助行動が促進される。マッチしていない場合であっても，状況的要因によっては（被援助者の困窮度が高い場合は），一定の範囲内で（犬を極端に嫌いでない限りは）援助行動が促進されると思われる。

一方で，被援助場面ではそれらの要因の明確な関係性は認められなかった。犬を飼っていても，犬同伴者からの援助が得られやすいとは捉えていない。むしろ困窮度が高い状況では，犬を連れていることが妨害要因となり，犬同伴者からの援助行動は期待できないと捉える傾向があった。他者を援助しようとする意欲と他者からの援助の期待は，影響を及ぼす要因や影響の仕方が異なっていることが示唆される。

犬介在介入の場面においても，同様の影響が現れる可能性がある。他者に対する援助行動や協力行動を促

したい場合，参加者が犬好きであれば社会的効果が生じるが，犬嫌いであれば効果は期待できない。犬に対する好悪感が中間的な場合は，状況設定（例えば，困っている内容や援助方法の明示）が重要となることが予想される。

本研究の限界として，第一に場面想定法を用いた調査であることがあげられる。場面想定法を用いることで犬と直接的に対面できない者を研究対象として，複数の状況を同じ条件下で比較することが可能となったが，当然ながら実際の場面とは異なる可能性がある。犬を介在させた実際の場面での行動実験を行い，本研究結果とともに相補的に検討することで，より正確な理解が得られると考えられる。第二に，援助行動に影響を及ぼす他の重要な要因が検討されていない点である。例えば，援助者のパーソナリティ特性（山際・堀 1991; 伊東 1996），被援助者の外見的特徴（Nadler et al 1982; McNicholas and Collis 2000）や同伴している犬の種類（Wells 2004），社会的立場（Sinha and Jain 1986）や社会規範（Oarga et al 2015），周囲にいる他者の存在（Darley and Latané 1968）等が援助行動の生起に関わっていることが報告されている。さらに，援助行動の生起には地域差があることが知られており（例えば，日本人は他者に援助要請を求めない傾向がある；Zheng et al 2021），そのような社会・文化的背景についても考慮しなければならない。実際の援助場面ではこれらの要因が複合的に影響を及ぼしており，包括的な理論的枠組みの構築と実証的検討が求められる。これらの要因と犬の同伴効果との関係について明らかにすることは，動物介在介入の社会的効果を最大化する上でも重要であると考えられる。

利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

謝　辞

本研究のデータ分析の際には，2019 年度日本獣医生命科学大学卒業生である岩坂知樹さんに協力して頂いた。本論文の執筆において生成 AI（Claude 3 Opus）を使用し，文章の校正，表現の明確化，および読みやすさの向上に活用した。生成 AI の使用は文章表現の改善に限定し，研究内容や結果の解釈には影響を与えていない。

文　献

1. 相澤直樹．2010．対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応について：他者の意図としての敵意と嫌悪に着目して 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，3，1-10.
2. Bernstein P, Friedman E, Malaspina A. 2000. Animal-assisted therapy enhances resident social interaction and initiation in long-term care facilities. Anthrozoös, 13, 213-224.
3. Darley JM, Latané B. 1968. Bystander intervention in emergencies: Diffusion of responsibility. Journal of Personality and Social Psychology, 8, 377-383.
4. Darnon C, Klein O. 2019. Expression of concern regarding six articles by Dr. Nicolas Guéguen. International Review of Social Psychology, 32, 11.
5. Eddy J, Hart LA, Boltz RP. 1988. The effects of service dogs on social acknowledgements of people in wheelchairs. Journal of Psychology, 122, 39-45.
6. Fick KM. 1993. The influence of an animal on social interactions of nursing home residents in a group setting. American Journal of Occupational Therapy, 47, 529-534.
7. Fridlund AJ, MacDonald M. 1998. Approaches to Goldie: A field study of human response to canine juvenescence. Anthrozoös, 11, 95-100.
8. Guéguen N, Cicotti S. 2008. Domestic dogs as facilitators in social interaction: An evaluation of helping and courtship behaviors. Anthrozoös, 21, 339-349.
9. Haughie E, Milne D, Elliott V. 1992. An evaluation of companion pets with elderly psychiatric patients. Behavioral Psychotherapy, 20, 367-372.
10. 伊東秀章．1996．援助行動の質―援助の質の高さと関連する性格特性とジェンダー―．The Japanese Journal of Experimental Social Psychology, 36, 261-272
11. Kotrschal K, Ortbauer B. 2003. Behavioral effects of the presence of a dog in a classroom. Anthrozoös, 16, 147-159.
12. Mader B, Hart LA, Bergin B. 1989. Social acknowledgments for children with disabilities: Effects of service dogs. Child Development, 60, 1529-1534.
13. Marr CA, French L, Thompson D, Drum L, Greening G, Mormon J, Henderson I, Hughes CW. 2000. Animal-assisted therapy in psychiatric rehabilitation. Anthrozoös, 13, 43-47.
14. McNicholas J, Collis GM. 2000. Dogs as catalysts for social interactions: robustness of the effect. British Journal of Psychology, 91, 61-70.
15. Nadler A, Shapira R, Ben-Itzhar S. 1982. Good looks may help: Effects of helper's physical attractiveness and sex of helper on males' and females' help seeking behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 41, 90-99.
16. 中川裕美，横田晋大，中西大輔．2015．実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討：広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験　社会心理学研究，30，153-163.
17. Oarga C, Stavrova O, Fetchenhauer D. 2015. When and why is helping others good for well-being? The role of belief in reciprocity and conformity to society's expectations. European Journal of Social Psychology, 45, 242-254.

18. O'Grady C. 2017. Researchers find oddities in high-profile gender studies. https://arstechnica.com/science/2017/11/researchers-find-oddities-in-high-profile-gender-studies/（最終閲覧日　令和6年12月1日）
19. Rogers J, Hart L, Boltz R. 1993. The role of pet dogs in casual conversations of elderly adults. The Journal of Social Psychology, 133, 265-277.
20. Sams MJ, Fortney E, Willenbring S. 2006. Occupational therapy incorporating animals for children with autism: A pilot investigation. The American Journal of Occupational Therapy, 60, 268-274.
21. Sinha A, Jain A. 1986. The effects of benefactor and beneficiary characteristics on helping behavior. The Journal of Social Psychology, 126, 361-368.
22. 高木修．1997．援助行動の生起過程に関するモデルの提案　関西大学社会学部紀要，1，1-21.
23. Tissen I, Hergovich A, Spiel C. 2007. School-based social training with and without dogs: evaluation of their effectiveness. Anthrozoös, 20, 365-373.
24. Wells DL. 2004. The facilitation of social interactions by domestic dogs. Anthrozoös, 17, 340-352.
25. 山際勇一郎，堀洋道．1991．援助行動に影響を及ぼす性格特性の総合的検討　Tsukuba Psychological Research, 13, 113-119.
26. Yamamoto S, Ohtsubo Y. 2020. Expression of concern about Dr. Nicolas Guéguen's article published in the Letters on Evolutionary Behavioral Science (LEBS). Letters on Evolutionary Behavioral Science, 11, 15-16.
27. Zhao X, Epley N. 2022. Surprisingly Happy to Have Helped: Underestimating Prosociality Creates a Misplaced Barrier to Asking for Help. Psychological Science, 33, 1708-1731.
28. Zheng S, Masuda T, Matsunaga M, Noguchi Y, Ohtsubo Y, Yamasue H, Ishii K. 2021. Cultural differences in social support seeking: The mediating role of empathic concern. PLoS ONE, 16, e0262001.

資　料

質問項目一覧

1. 公園に一人で歩いている人（X さん）がいました。X さんは道に迷って，同じ場所をウロウロしています。あなたは X さんに道を教えてあげると思いますか？
2. 公園に子連れで歩いている人（X さん）がいました。X さんは道に迷って，同じ場所をウロウロしています。あなたは X さんに道を教えてあげると思いますか？
3. 公園に犬連れで歩いている人（X さん）がいました。X さんは道に迷って，同じ場所をウロウロしています。あなたは X さんに道を教えてあげると思いますか？
4. 公園に一人で歩いている人（X さん）がいました。X さんは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには，重いフタを持ち上げなくてはいけません。あなたは排水溝のフタを開けるのを手伝ってあげると思いますか？
5. 公園に子連れで歩いている人（X さん）がいました。X さんは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには，重いフタを持ち上げなくてはいけません。あなたは排水溝のフタを開けるのを手伝ってあげると思いますか？
6. 公園に犬連れで歩いている人（X さん）がいました。X さんは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには，重いフタを持ち上げなくてはいけません。あなたは排水溝のフタを開けるのを手伝ってあげると思いますか？
7. 公園に一人で歩いている人（X さん）がいました。あなたは道に迷って，同じ場所をウロウロしています。X さんは道を教えてくれると思いますか？
8. 公園に子連れで歩いている人（X さん）がいました。あなたは道に迷って，同じ場所をウロウロしています。X さんは道を教えてくれると思いますか？
9. 公園に犬連れで歩いている人（X さん）がいました。あなたは道に迷って，同じ場所をウロウロしています。X さんは道を教えてくれると思いますか？
10. 公園に一人で歩いている人（X さん）がいました。あなたは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには，重いフタを持ち上げなくてはいけません。X さんは排水溝のフタを開けるのを手伝ってくれると思いますか？
11. 公園に子連れで歩いている人（X さん）がいました。あなたは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには，重いフタを持ち上げなくてはいけません。X さんは排水溝のフタを開けるのを手伝ってくれると思いますか？
12. 公園に犬連れで歩いている人（X さん）がいました。あなたは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには，重いフタを持ち上げなくてはいけません。X さんは排水溝のフタを開けるのを手伝ってくれると思いますか？

犬の同伴が援助行動に及ぼす影響：場面想定法による検討

野瀬　出[1)]・政本　香[2)]・林　幹也[3)]・柿沼美紀[1)]

1）日本獣医生命科学大学獣医学部
2）松山東雲女子大学人文科学部
3）明星大学心理学部

(2025 年 1 月 23 日受付 /2025 年 3 月 19 日受理)

要約：本研究では，犬の同伴が援助行動に及ぼす影響を場面想定法により検討した。犬の飼育経験者 282 名，非飼育経験者 262 名を対象に web 調査を行った。調査では 3 名の人物（公園での一人歩き，子連れ，犬連れ）が登場し，2 つの援助内容（道案内，鍵拾い）について，回答者が登場人物に援助を求められる援助場面，もしくは回答者が登場人物に援助を求める被援助場面において，それぞれ援助要請に応えるかどうかについて評定を求めた。データ分析の結果，援助場面においては犬の飼育経験があると，犬同伴者に対する援助行動が促進されること，犬の飼育経験がなくても犬同伴者の困窮度が高い場合には援助する傾向があること，犬に対して好意的であれば犬同伴者への援助行動が促進され，特に困窮度が高ければ促進されやすくなることが明らかになった。一方で，被援助場面においては，犬の飼育経験や犬への好悪感による影響は限定的であった。犬を連れていることにより得られる社会的効果は，これらの要因が相互作用することで生じている可能性が示唆された。

キーワード：犬の同伴，援助行動，場面想定法

J. Anim. Edu. Ther. 16: 1–9，2025

第 17 回動物介在教育・療法学会学術大会（2024.9.14.）

実践報告

猫との暮らしは寝たきり生活の高齢者にどのような変化をもたらすか

土田浩生 *

川田医院

How can living with a cat change the lives of bedridden elderly people?

Tsuchida Hiroki*

Kawata Clinic

はじめに

日本には寝たきり生活の高齢者が 300 万人以上いると推計され，この数は世界ワースト 1 位といわれている。その多くは医療および介護施設などでケアを受けながら生活をしているが，家族による介護と訪問看護・訪問リハビリなどの介護サービスを利用し自宅で暮らしている人もいる。しかし自宅ではリハビリやレクリエーションに限界があるため，実際にはテレビを見たりラジオを聞いたりしながら一日中坐位や臥位で生活している人が多い。その結果筋肉量が減少し筋力は低下し（サルコペニア），さらに ADL の低下や認知機能の低下，抑うつ状態が進行する（フレイル）。また介護する家族の肉体的および精神的負担も大きいため寝たきり生活の高齢者の増加は社会の大きな問題になっている。今日までに動物を飼育することが人の健康に有効であるという研究は多数あるが，寝たきり生活の高齢者が猫と暮らすことによって生じる医学的効果については報告が少ない。

目的

往診している寝たきり生活の高齢者が新たに猫と生活をすることになった。猫の存在がその高齢者の身体面および精神面にどのような影響を与えたかを報告する。

対象者と評価方法

対象者は両側膝関節症および認知症により ADL が低下しベッド上生活になった高齢者で，対象者の娘，訪問看護師，訪問理学療法士へのアンケート調査を行った。なお対象者やその家族，訪問看護・リハビリ施設は今回の発表に同意している。

経過と評価

対象者は両側膝関節症と認知症を患う 92 歳の女性。元々は家族の介助で川田医院に通院されていたが膝関節症の悪化で通院が困難となり定期往診に変更となった。2 階の自室でベッド上生活となりトイレ以外はほとんどベッドから移動せず，タブレットで動画を見て過ごす毎日だった。定期的に訪問看護師および訪問理学療法士が在宅でケアやリハビリを行っていたが全身の関節痛や体力の低下により ADL はさらに低下していった。対象者は犬が大好きで以前は飼っている犬と一緒に遊んでいたが，犬は 1 階の部屋で生活しているため階段を降りて会いにいく事が出来なくなり「寂しい」と話していた。そこで家族が「部屋の中で触れあえる動物を飼おう」と思い猫を迎え入れることを決め，性格などいろいろと考えた結果ミヌエットを選んだ。対象者は猫があまり好きではなかったが実際に飼ってみると猫をとても可愛がり笑顔が増えた。猫もとても懐き甘えん坊な性格のため友好な関係を築けた。猫を飼うまで対象者はベッド上で横になっていることが多かったが，猫じゃらしを持って腕を動かして遊ぶ，トリーツを与える時は指先で緻密な動作を行う，猫を撫でるときは椅子に移動して座り直すなど積極的に体を動かすようになった。また猫と遊んでいるときは関節の痛みが軽減していると話していた。さらに笑顔が増え，猫への話しかけだけでなく家族との会話も増えた。さらに隣の部屋にいってもっと猫と遊ぶという目標ができ，それに向かってリハビリを頑張る意欲が増した。訪問看護師や訪問理学療法士も猫の存在による療養面およびリハビリ面での効果を実感している。家族は対象者の身体的および精神的変化をとても嬉しく思っており，猫を迎え入れて大正解だったと

* 連絡先：pfpyc199@yahoo.co.jp

遊ぶ

撫でる

話してくれた。

感想・考察

動物を飼育する事は健康に良い影響を与えるといわれ，寝たきり生活の高齢者への ADL 維持・改善が期待される。最近では猫の報告もみられ，ふれあいや遊びの効果だけではなく「ゴロゴロ音」や「ツンデレ性格」についても研究されている。今回の対象者では猫と暮らすことで①痛みの訴えが減った②よく笑うようになった③家族との会話が増えた④意欲的になった⑤自発的に動くようになった⑥孤独感が減った，という変化がみられた。これは予想以上の効果と感じた。犬も猫も共通して肌に触れ合う心地良さやぬくもりを感じ情動面にプラスに働くが，犬と比して猫の方が「大きさや柔軟さがベッド中心の人にとっては距離感がよい」や「遊ぶ内容もほどよい動きでありリハビリとして安全」という意見があった。今後「自宅での介護」の増加が予想される。動物によって性格や環境が異なるため，種による利点や欠点を考慮して高齢者と家庭動物の両者にとって安全で幸福な関係を築いていく事が大切である。

研究発表

第 17 回動物介在教育・療法学会学術大会（2024.9.14.）

コンパニオン・アニマル（イヌ）が高齢飼育者に与える社会心理学的効果について

河原真衣[1)]*・八城　薫[2)]

1）桜美林大学大学院国際学術研究科
2）大妻女子大学

The Socio-Psychological Effects of Companion Animals (Dogs) on Elderly Caregivers

Kawahara Mai[1)]*, Yasahiro Kaoru[2)]

1）Graduate School of International Academic Research Studies, J. F. Oberlin University Graduate Division
2）Otsuma Women's University

目的

コンパニオン・アニマル（イヌ）が飼育者に与える社会的効果は，先行研究によって知見が一致していない部分もあるが，高齢者にとってイヌの与える社会化促進効果は有用なものとなり得るという知見がある。本研究では，コンパニオン・アニマル（イヌ）が高齢飼育者に与える効果について社会心理学的側面から探索的な研究を行った。

方法

本研究では，コンパニオン・アニマル（以降，CA と称す）と同伴で入居できる介護付き老人ホームに入居中の高齢者（以降「施設入居者」）7 名，内訳は 70 代女性（イヌ飼育者）2 名，80 代男性（犬飼育経験者で現在は非飼育者），80 代女性（ネコ飼育者）1 名，80 代女性（非飼育者）1 名，90 代女性（非飼育者）1 名，加えて，家族と生活している 70 代女性（イヌ・カメ飼育）1 名（以降「自宅飼育者」），介護付き老人ホームの職員 2 名（以降「施設職員」）を対象に，半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。

質問内容は，自身の氏名と CA 名，インタビュー当日の行動，基本的な 1 日の行動，毎日の習慣や趣味，CA の性格や特徴，施設や地域の高齢者向けのイベントの参加頻度，参加したいイベントについて，CA 同伴イベントや動物介在イベントへの参加意欲などであった。なおインタビュー時，「ペット」や各 CA の名前を用い，CA に関する質問に偏らないよう注意した。最後にイベント参加に関する質問を行なったが，これはイヌの社会化促進効果検討のためである。インタビュー時間は，施設入居者・自宅飼育者が 30 分程度，施設職員が 15 分程度であった。なお施設入居者，施設職員への調査については施設の許可を得て実施し，自宅飼育者の一般高齢者は縁故法により依頼し，同意の得られた方を対象とした。分析には，KH Coder（樋口，2014）を用いた。

結果と考察

まず対象者の語りについて，飼育属性を外部変数としての分析を行った結果，イヌ飼育者は他の属性よりも「一緒」「聞く」がよく出てきた語であった。インタビューでは日常の習慣に関する質問に対して「今ダイエット中なんですけどトマトあげて一緒に痩せてるようなもの。」という語りや，CA（イヌ）の性格に関する質問をした際には「よく○○ちゃんは本当に私の話をちゃんと聞いてるみたい。」という語りなどがみられた。このことから他の属性に比べてイヌ飼育者は，日常において CA（イヌ）と「一緒に」何かをしているという意識があること，コミュニケーション場面において，CA（イヌ）によく話しかけていることが示唆された。

そして語と語の共起ネットワーク分析の結果，CA（イヌ）飼育者の語りは，「運動に対する興味・意識」「他の入居者とコミュニケーションをとる場面や話題」「部屋での CA（イヌ）との生活，CA（イヌ）の行動」「生活習慣」「共生に対する意識」「現在の CA（イヌ）を飼うきっかけ」「自身の CA への印象」「趣味」の 9

* 連絡先：m.kawahara2001@gmail.com

つの要素に分類されると解釈した。一部抜粋すると「運動に対する興味・意識」の要素では，CA（イヌ）について性格や特徴に関する質問をした際に「○○ちゃん太りすぎないようにね，私も気をつけるからあの元気で痩せるように頑張るからねって言ってるのね。」という語りがみられた。「他の入居者とコミュニケーションをとる場面や話題」の要素では，入居者同士で CA についての話題が出るか質問した際に「あの体操の時に（省略）○○ちゃんがお散歩から帰ってくるときがあるんです。（省略）そのときに少しお話ししますね。」という語りがみられた。「共生に対する意識」の要素では，施設での暮らしについて質問した際に「人の痛みも自分の痛みとして受けたいし喜びは本当に一緒に喜んであげたい。」という語りがみられた。

本研究ではイヌの社会化促進効果検討のためイベント参加に関しての質問を行なったが，分析の結果 CA（イヌ）のイベントへの参加促進効果は見いだせなかった。

以上の結果を踏まえて，イヌを飼育することの心理的効果としては，「運動に対する興味・意識」の語り等から**健康への動機づけ効果**，「共生に対する意識」の語り等から**共生意識や責任感**の出現する効果が示唆され，社会的効果としては，イヌ飼育者の語りから「聞く」の単語がよく出てきた結果や，「他の入居者とコミュニケーションをとる場面や話題」の語り等から**コミュニケーションの促進**効果が示唆された。そして本研究の目的である社会心理学的効果を検討する上で，心理的効果と社会的効果の両側面を考慮した場合，CA（イヌ）が与える健康への動機づけ効果がイベント参加という社会化促進効果を生み出している可能性や，共生意識が生まれる効果，第三者に CA（イヌ）が与える心理的効果によるコミュニケーション促進効果が示唆され，社会化促進効果においては間接的に効果が示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり，ご多忙にもかかわらず快く調査にご協力頂いたウェルハイム八王子の施設長川口航平氏及び職員の方，入居者様，インタビューにご協力いただきました方々に感謝申し上げます。

主要引用・参考文献

金児 恵．(2006)．コンパニオン・アニマルが飼主の主観的幸福感と社会的ネットワークに与える影響．心理学研究，77（1），1-9.

樋口耕一 2020『社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第 2 版』ナカニシヤ出版.

研究発表

第 17 回動物介在教育・療法学会学術大会（2024.9.14.）

動物に配慮したふれあいがふれあい者に与える心理的生理的影響について

土田あさみ *・内山和聡・小泉　楽

東京農業大学農学部

Psychological and physiological effects of animal-considerable interaction on humans

Tsuchida Asami*, Uchiyama Kazutoshi, Koizumi Raku

Tokyo University of Agriculture

目的

近年動物福祉の意識の高まりを受けて，動物に配慮したふれあい方を模索する動きがみられる。テンジクネズミ（*Cavia porcellus*）は温順で扱いやすいため，動物の扱いに慣れていない人でも安心してふれあうことができる。しかし，テンジクネズミは元来臆病で敏感であり，ふれあいによるストレス（Gut et al 2018; Kase et al 2021）に対して配慮が必要である。そこで，Gut et al（2018）の方法を参考に，テンジクネズミと直接ふれあわない手法を試作し，ふれあい者への影響について検討した。

方法

本実験は農学部学生 23 名（男性 12 名，女性 11 名，平均年齢 20.5 ±標準偏差 1.0）を対象者として，東京農業大学の人を対象とする実験・調査等に関する委員会（承認番号 2236）および動物実験委員会（承認番号 2027047）の承認をそれぞれ得て行われた。実験参加者は予め 5 分間の単純計算を行い，その後動物とのふれあい（実験群：17 名，男性 9 名，女性 8 名）あるいは絵本の黙読（対照群：6 名，男性 3 名，女性 3 名））を 15 分間行った。参加者の影響として，計算の前（Pre）と後（Post1），そしてふれあいあるいは絵本黙読の後（Post2）に，二次元気分尺度（Two-Dimensional Mood Scale-Short Term: TDMS），唾液コルチゾル濃度（Salivary Cortisol ELISA Kit），および唾液アミラーゼ活性（唾液アミラーゼモニター）を測定した。ふれあい 10 分経過時にふれあい対象の印象評価を行った。対照群も同様に各測定を行った。実験群のふれあい方法は，45 × 45 × 25 cm の木製巣箱を容れた 90 × 90 × 30 cm の箱にテンジクネズミ 3 頭を放し，箱の一辺を開閉式にしてその部分でテンジクネズミに牧草を与える方式とした（写真）。この手法により，テンジクネズミは人とかかわることを自ら選択することが可能となった。

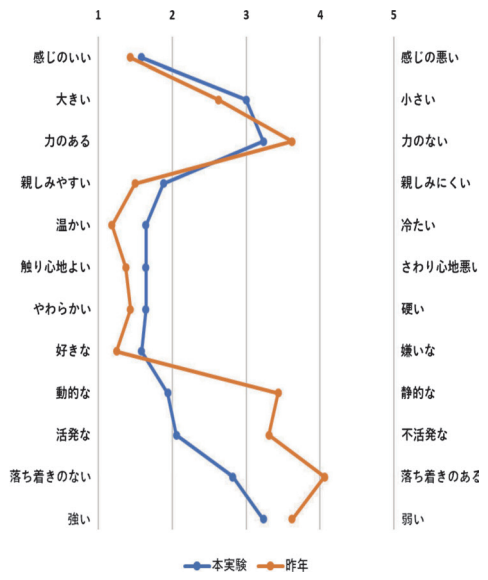
結果

TDMS では実験群の安定度および快適度がふれあい後有意に上昇した（安定度 $\chi^2(2) = 22.16$，$p < .001$；快適度 $\chi^2(2) = 18.11$，$p < 0.001$）。唾液アミラーゼ活性は実験群対照群のいずれにも有意な変化がみられなかったが，唾液コルチゾル濃度は対照群で絵本の黙読後に有意に減少した（$\chi^2(2) = 8.10$，$p < 0.05$）。実験群の印象評価では「動的な」「活発な」「落ち着きのない」という動きを現わす評価が，昨年度の評価よりも高い値を示した（右図）。

考察

動物とのふれあいは動物と相互のやりとりが魅力になるが，ふれあい方法によっては動物は身動きできず人側の一方的な関与にとどまることがある。そこで今回我々は動物が人とのふれあいを選択できる手法を試用してその効果について検討した。その結果，テンジ

* 連絡先：a3tuschi@nodai.ac.jp



クネズミが膝の上に乗らないふれあい方法においても，昨年同様動物とのふれあい後にふれあい者の気分尺度は正の効果を示した。また，今回のふれあい方方法は，膝の上でふれあう方法に比べて，テンジクネズミの活発な動きをふれあい者に印象付けることが明らかになった。したがって，テンジクネズミとのふれあいはふれあい方法によってふれあい者にもたらす印象に違いがあることが示唆された。

謝辞

本実験にご協力くださった東京農業大学農学部の学生の皆さまに厚く御礼申し上げます。

利益相反

本実験に関する利益相反はない。

引用・参考文献

Gut W, Crump L, Zinsstag J, Hattendorf J, Hediger K (2018) The effect of human interaction on guinea pig behavior in animal-assisted therapy. Journal of Veterinary Behavior 25, 56–64.

Kase C, Terashi K, Morioka A, Toyoda H, Uetake K. (2021) Short-term effects of petting zoos on the behavioural and salivary cortisol of guinea pigs. Animal Behaviour and Management. 57, 137–145.

土田あさみ・白石れな・松井悠花・阿部建太・川嶋　舟.（2024）質感を向上させたぬいぐるみおよび本物とのふれあいにおける人への心理面および生理面への影響について．動物介在教育・療法学雑誌 15，15–16.

研究発表

第 17 回動物介在教育・療法学会学術大会（2024.9.14.）

動物園における動物介在教育
―動物園職員と保育教員の認識に着目して―

佐野葉子 *

東京福祉大学・大学院　保育児童学部

The animal assisted education at zoos - The objectives of early childhood education at a zoo: differences in zookeepers' and kindergarten teachers' perspectives

SANO Yoko*

Tokyo University and Graduate School of Social Welfare

【目的】

動物介在教育は，幼稚園教育要領や保育所保育指針，認定こども園教育・保育要領，小学校学習指導要領などを基盤とし，その目的やねらいを定め実施されるべきものである。また動物介在教育において，子どもが動物と関わることにより，命の大切さや思いやりの心を育むことができるようになり，子どもの発達によい影響を与えることが報告されている。しかしただ子どもと動物が関わっていれば，子どもに良い影響があるわけではなく，子どもと関わる大人の適切な働きかけが必要である。日本において動物園は博物館法で定められた施設であり，レクレーション的な要素が大きいと認識されることが多いが，本来動物園はレクレーション以外に「種の保存」，「教育」，「調査研究」などの重要な役割を担っている。今回動物園の教育担当の職員に動物園での教育に関してどのような認識を持っているのか。また動物園を利用する側の幼稚園教諭・保育士（以下保育教員とする）は動物園の利用に関してどのような認識を持っているのか明らかにすることを目的とし研究を行った。

【方法】

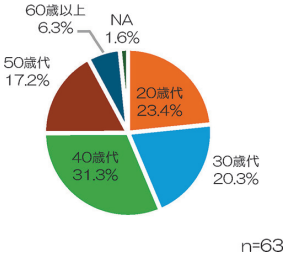
対象者は，日本動物園水族館協会会員施設 91 園の教育担当者で，各施設に動物園での教育に関する無記名の自己記入式の調査票を 1 園につき 2 通郵送で配布し郵送で回収した。また保育施設については，保育所・認定こども園（以下保育施設とする）10 施設の保育教員 120 名で，施設長に許可を得たのち，動物園での教育に関する無記名の調査票を施設ごとに郵送で配布し郵送で回収した。

研究対象者には，紙面で研究の目的と方法，また研究参加は自由参加であり，参加しなくても不利益は生じないこと，無記名のため個人は特定されないことを説明し，同意が得られた場合に研究に参加してもらった。

【結果】

1）動物園職員

動物園 54 園 63 名から回答を得た。回収率は 59.3％であった。対象者の年齢は，20 歳代 23.4％，30 歳代 20.3％，40 歳代 31.3％，50 歳代 17.2％（図Ⅰ参照）で，性別は男性 51.6％女性 46.9％であった（図Ⅱ参照）。所持している資格は飼育技師，学芸員，次いで獣医師となっていた（図Ⅲ参照）。動物園職員は動物園での教育の目的について命の大切さを学んでほしい，動物に対する驚きや発見をしてほしい，また動物の生態を学んでほしいと考えている人が多かった。



図Ⅰ　動物園職員の年齢

* 連絡先：yosano@ed.tokyo-fukushi.ac.jp

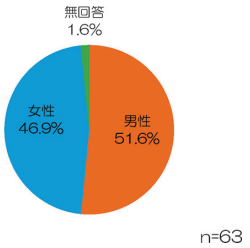


図 II　動物園職員の性別

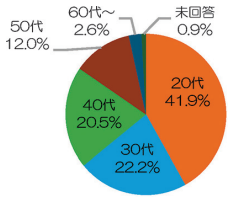


図 IV　保育職員年齢

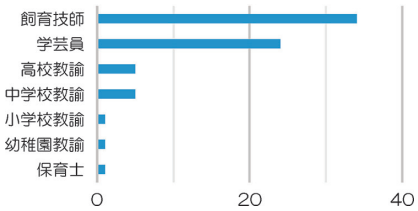


図 III　動物園職員資格

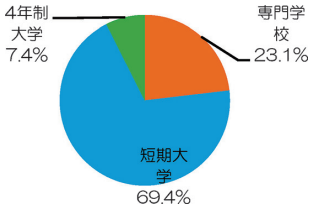


図 V　保育教員養成施設

2）保育教員

保育教員の年齢は 20 歳代 41.9％，30 歳代 22.2％，40 歳代 20.5％，50 歳代 12.0％であった（図Ⅳ参照）。保育者の雇用形態は正規雇用 71.4％，パートタイム 28.6％であった。保育教員の卒業した養成施設は専門学校 23.1％，短期大学 69.4％，4 年生大学 7.4％であった（図Ⅴ参照）。

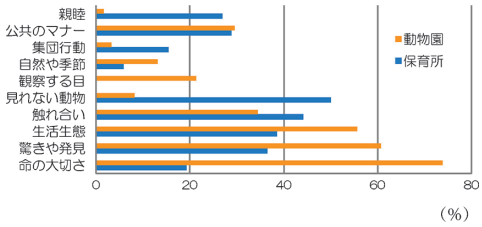


図 VI　動物園へ行く目的

考察

動物園は日常の生活では見ることができない動物を飼育していたり，子どもが動物と実際にふれあうことができる。動物園の教育担当者は子どもたちに命の大切さや，動物の不思議や，動物の生態について学んでほしいと考えていた。しかし保育教員は命の大切さよりも，普段見れない動物を見ることや，公共の場でマナーを守ることを重視していた（図Ⅵ参照）。子どもが動物園を訪れる際にはすべての園が動物園の職員と打ち合わせすることは現実には難しい部分もあると思われるが，子どもにとって効果的な動物介在教育を行う際には，双方の情報共有を行う必要性があるのではないかと考えられた。今後は動物園の職員と保育者が共通認識できるような場を設けることが必要ではないかと考察された。

引用・参考文献

・藤岡久美子：子どもの発達と動物とのかかわり：動物介在教育の展望, 山形大学大学院教育実践研究科年報（4）4-11，2013

実践報告

第 17 回動物介在教育・療法学会学術大会（2024.9.14.）

不登校生徒とその保護者、教員らへのホースセラピーの実施と有用性について

光永雅子 *

特定非営利活動法人セラピー乗馬てくてく育成会

The implementation and usefulness of horse therapy for school absentee students, their parents, and teachers

Mitsunaga Masako*

Specified Nonprofit Corporation Serapi-jouba tekuteku ikuseikai

1. はじめに

特定非営利活動法人セラピー乗馬てくてく育成会（2013 年活動開始，2017 年 NPO 法人設立）では，セラピーホース 6 頭（ポニー 3 頭，中間種 2 頭，サラブレッド 1 頭）による不登校及び障がいを持つ子どもへの乗馬の他，リハビリ乗馬，フレイル予防乗馬など，個々人の希望や状態に応じた乗馬を提供しており，現在，3 歳～ 75 歳の方が利用している。

今回の活動は，徳島県阿波市教育支援センターに通級する生徒（中学生）とその保護者，教員らを対象に実施。通常の乗馬の他，ひき馬，餌やり，ケアの四つの活動から自由に選べるようにすることで，馬との関り方のニーズを知り，乗馬だけの場合と生徒たちの気持ちや行動に違いがあるのかどうかを知ること，また，生徒だけでなく，保護者，教員らにも活動に参加してもらい，子どもを支える人たちに対するホースセラピーの有用性を探ることを目的とした。

2. 実施方法と参加人数

2023 年 9 月～ 12 月の期間で月 1 回，計 4 回実施。1 回の活動時間は約 90 分。乗馬，ひき馬，餌やり，ケアの中から希望する活動を選んで行ってもらう（全てを選んでも良い）。ケアの内容は，9 月はシャンプー，10 月は毛刈り，11 月は乗馬前のケア，12 月は

表 1　参加活動人数の内訳

a : 生徒、b : 保護者、c : 教員、d : 教育実習生、e : スクールカウンセラー

	9/29	10/30	11/24	12/18
乗馬	a : 4、b : 2、c : 2	a : 4、d : 2、e : 1	a : 4、d : 2、e : 1	a : 5、b : 2、c : 2
ひき馬	a : 4、b : 1、c : 1	a : 4、d : 2	a : 4、d : 2	a : 5、b : 2、c : 2
餌やり	a : 4、b : 1、e : 1			a : 5
ケア	a : 5、b : 3、c : 3	a : 4、c : 3、d : 2、e : 1	a : 4、c : 2、d : 2、e : 1	a : 5、c : 3
参観	b : 1	なし	なし	b : 3
合計	a : 5、b : 4、c : 3、e : 1	a : 4、c : 3、d : 2、e : 1	a : 4、c : 2、d : 2、e : 1	a : 5、b : 5、c : 3

表 2　アンケートの質問事項

問1	今日体験したホースセラピーは何でしたか。
問2	これまで何回ホースセラピーを受けましたか。
問3	なぜホースセラピーを受けようと思いましたか。
問4	体験したホースセラピーについて感想をお書きください。
問5	ホースセラピーを受ける前と受けた後で、気持ちや体調に変化はありましたか。
問6	馬に関する活動で、これから体験してみたいことはありますか。

* 連絡先：masako.mioka@gmail.com

表 3　生徒の回答

問3	動物が好きだから。／身近にいない動物だから。／普段の生活では経験できないことだから。
問4	初めてシャンプーをして、すごく楽しかった。／ケアをすることで、もっと愛着がわいた。／乗馬だけのときより馬を身近に感じた。
問5	セラピーを受けるたび、毎回もっと楽しくなる。／上手に乗れるようになるのが嬉しい。／もっといろんなことを体験したいと思うようになった。

表 4　保護者の回答

問3	息子が誘ってくれたので。／孫が一緒に参加しようと誘ってくれた。
問4	想像以上に楽しく、馬の揺れが気持ちよかった。／どこまでも遠くへ行ってみたい気持ちになった。
問5	体験の後は気持ちが前向きになった。／活動のあと、気持ちがすっきりした。

表 5　教員の回答

問4	見ていると簡単そうだが、なかなか思い通りにいかなかった。／馬上からみる景色はいつもと違い感動した。／馬に揺られているだけで、喜びが湧き上がってくる感じだった。
問5	いつも見ていていいなと思っていたので、とにかく楽しかった。／馬と触れ合うことで、心が解放されたような気持ちになった。／馬の扱い方が分からなかったが、それでも触れ合うこと自体が大切なんだと感じた。／活動の後、気持ちがポジティブになった。

表 6　教育実習生の回答

問4	初めて馬を触ったが、ケアしたことでとても身近に感じ愛着がわいた。／言葉は通じないけれど、心が通い合うような気持ちになれた。／生徒たちが乗り方や馬の個性を教えてくれて、とても楽しかった。／どこまでも馬に乗って走ってみたいと思った。
問5	馬との時間に心身ともに癒された。／とてもリラックスした気持ちになり、セラピーの意義を改めて感じることができた。／馬たちが受け入れてくれたおかげで、とても穏やかな気持ちになった。

表 7　スクールカウンセラーの回答

問4	乗馬の前は怖いと思っていたが、実際に乗って見るととても気持ちが良かった。／生徒たちが装具の付け方を教えてくれたりして、とても楽しく体験ができた。
問5	思い切って乗馬をして、気持ちが晴れ晴れした。／乗る前はわくわくしていたが、乗った後は、馬にも人にも感謝の気持ちがわいてきた。／生徒たちが積極的に活動をしているのを見て感心した。

乗馬後のケアを行った。それぞれの活動に指導員がつき，乗馬歴のあるボランティアが補助を行った。なお，活動には参加しないが，参観を希望した人数も記載した。

3. 評価方法

評価方法としてアンケートを実施し，その回答を評価とした。アンケートは記述式であり，参加者全員から回答と発表についての同意を得ている。回答の中から抜粋して報告する。

4. おわりに

アンケートの回答から，今回の活動は参加者の立場，年齢を問わず，気持ちや行動に良い影響を与えたことが伺える。動物に乗る，あるいは触れるという多様で広範な体感を伴った馬との活動がもたらす影響を，今後も継続して調査していきたいと考えている。

なお今回の活動は，ハートフル社会貢献基金，赤い羽根共同募金徳島県共同募金会より助成を得て実施した。両団体に心から感謝申し上げる。

研究発表

第 17 回動物介在教育・療法学会学術大会（2024.9.14.）

ホースコーチングプログラムの有効性
―プログラムにおける気づきの体験分析―

八城　薫[1)*]・山上高生[2)]・薮内直子[2)]・安野舞子[3)]・横川滋章[4)]

1）大妻女子大学
2）(株)アワーズ _ アドベンチャーワールド
3）横浜国立大学
4）関西国際大学

Effectiveness of a Horse Coaching Program: A Qualitative Analysis of Awareness Experiences within the Program

Yashiro Kaoru[1)*], Yamagami Takao[2)], Yabuuchi Naoko[2)], Yasuno Maiko[3)], Yokogawa Shigeaki[4)]

1）Otsuma Women's University
2）AWS CO., LTD
3）Yokohama National University
4）Kansai University of International Studies

目的

アドベンチャーワールドでは，2023 年から企業人の人材育成を目的としたホースコーチングプログラムを提供している。このプログラムでは，人間のわずかな感情の機微を感じ取り同調する「ミラーリング」という特性などをもつウマとのふれあいを通して，自身の内側の自分と対話（内省）し，感覚や感情に自覚的になることで，セルフ・リーダーシップ（自己洞察，自己受容，自己調整）を向上させることを目指している。また，ノンバーバルなコミュニケーションによって，ウマとゼロからの関係を築いていく過程で，他者を信じゆだねる感覚を磨き，他者とかかわることに幸せを感じられる，真のコミュニケーションを身に着けることもねらいとしている。本研究では，このプログラムの中で生じる参加者の気づきの体験についての自由記述内容を分析することで，プログラムの有効性について検証することを目的とした。具体的には，このプログラムにとって重要な位置づけとなるウマと，アドベンチャーワールドで飼育経験のあるコーチ（プログラムをファシリテートするスタッフ）とのかかわりから生じた「気づき」について，分析を行った。

方法

調査対象者は，2023 年 5 月から 2024 年 3 月までに当該プログラムに参加し，本研究へのデータ提供に同意した 33 名（男性 17 名，女性 16 名）で，年代は 20 代 8 名，30 代 9 名，40 代 12 名，50 代 4 名であった。分析に用いたデータは，参加後アンケートの回答であり，アンケートには年齢，性別，職業，職位といったデモグラフィック変数と，「ウマとのかかわりを通して得た気づき」「コーチとのかかわりを通して得た気づき」の自由記述の他に，プログラムの時間の適切さや満足度，改善点などの自由記述が含まれていた。なお，本研究およびその公表に関しては，(株)アワーズを通じてプログラム参加者から許可を得ている。分析には樋口（2020）の KH coder 3 を使用した。

結果

気づき体験の分析には，記述の中での頻出語数と，同時に出現する語から軸（成分）を抽出して各語を軸の布置関係でとらえることのできる対応分析，さらに記述の中に同時に出現（共起）する語と語が結ばれ，そのまとまりを視覚的にとらえることが出来る共起ネットワークの分析を用いた。なお本稿では，人生キャリア，職業キャリア，仕事のポジションなどを反

* 連絡先：yashiro@otsuma.ac.jp

映すると考えられる参加者の年代を外部変数に加えた分析を実施した。なお，本稿では紙面の制約上，結果の図は掲載できないため，結果図は発表の際に公表する。

「ウマとのかかわりを通しての気づき」の分析

ウマから得た気づきで多くみられた語（語数）は，出現数順に「ウマ（35)」「自分（30)」「相手（13)」「気づく（13)」であった。対応分析による語の布置関係と共起ネットワークおよび記述の文脈から，ウマとのかかわりを通した気づきには，①コミュニケーション（伝える，伝わる）に関する気づき，②ものごとの捉え方，感情コントロールに関する気づき，③他者の理解・受容・承認の大切さへの気づきの 3 つの気づきの要素があると解釈された。また，年代の布置や共起関係をみると，①は 20 代が，②は 30 代が，③は 50 代が各気づきの要素のプロットエリアに布置および各要素の語との共起関係を示した。40 代は対応分析において，原点付近に布置しており，特徴的な偏りはみられなかった。

「コーチとのかかわりを通しての気づき」の分析

コーチから得た気づきで多くみられた語（語数）は，出現数順に「自分（40)」「参加者（29)」「感じる（17)」「コーチ（17)」であった。対応分析と共起ネットワークから，①感情・考え方と向き合い，違いに気づく，②内省と共有時間を持つことの大切さへの気づき，③プログラムにかかわる人々に対する敬意と感謝への気づき，の 3 つの気づきの要素があると解釈された。対応分析の布置から①は 20 代，②は 30 代・40 代，③は 50 代が各気づきの要素のプロットエリアに布置していた。

考察

ウマを介しての「ものごとの捉え方，感情コントロールに関する気づき」と，コーチを通じての「感情・考え方と向き合い，違いに気づく」「内省と共有時間を持つことの大切さへの気づき」は，プログラムのねらいである『内側の自分と対話（内省）し，感覚や感情に自覚的になる』ことと位置づけられ，それらの気づきを経てセルフリーダーシップ（自己洞察，自己受容，自己調整）の向上につながっていくと考えられる。また，ウマを介しての「他者の理解・受容・承認の大切さへの気づき」「コミュニケーション（伝える，伝わる）に関する気づき」と，コーチングの中で生まれる「プログラムにかかわる人々に対する敬意と感謝」は，プログラムのねらいである『他者を信じゆだねる感覚を磨く』『真のコミュニケーションを身に着ける』につながる気づきであると考えられる。

ウマとの実践的なワークは，楽しさや喜びといった高揚感も伴いつつも，対人コミュニケーションでは顕在化しない困難やチャレンジングな場面に直面することになる。こうした経験と，プログラム全体を通して続けられる自己内省やコーチ・参加者同士での内省の共有（シェアリング）が，セルフリーダーシップと真のコミュニケーションを身につける機序となっていることが示唆された。さらに年代によって気づきの要素に偏りがみられたことから，今後はライフステージや社会的役割に応じたプログラムの効果の質的な相違，プログラムへの再受講の効果についても検証したい。

参考文献

樋口耕一 2020『社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第 2 版』ナカニシヤ出版.

研究発表

第 17 回動物介在教育・療法学会学術大会（2024.9.14.）

イヌの社会受容に関する基礎的調査
―飼育経験および好悪感による影響―

助川東悟 [1)]・野瀬　出 [1)*]

日本獣医生命科学大学 比較発達心理学研究室

A study on the social acceptance of dogs: The influence of dog ownership experience and preferences

Sukegawa Tougo[1)], Nose Izuru[1)*]

Laboratory of Comparative Developmental Psychology, Nippon Veterinary and Life Science University

目的

社会受容（social acceptance）とは，対象が地域社会や人々の理解を得て受け入れられることである。社会受容が成立するためには，対象の社会的価値を周知させ，法律や規約などのルールを整備するだけでなく，人々が対象に対して肯定的な態度を形成しているか，少なくとも否定的な態度を形成していない状態でなければならない。

動物介在介入を普及させるためには，介在動物が社会的に受け入れられている必要がある。動物が同じ空間にいることに対して人々が否定的である場合は，広く浸透させることが難しくなる。本研究では，公共空間にイヌを入れることを人々がどの程度受け入れているかについて Web 調査を実施した。また，イヌの社会受容に影響する要因について明らかにするため，回答者の基礎的属性（性別，年齢，飼育経験，居住地域等）との関連性について検討した。

方法

対象　日本に在住している 18 歳～ 65 歳の成人が対象であった。データ収集は Web 調査会社（クロス・マーケティング）に依頼した。イヌの飼育経験者と非飼育経験者との割合が半々になるように調整した。参加者には Web 画面上で調査内容について説明し，参加の承諾を得た。調査は匿名で実施し，個人が特定可能な情報は収集しなかった。

質問票　イヌが公共空間に滞在している状況について，受容できるかどうか 5 段階での評定を求めた（1: 受け入れられない―5：受け入れられる）。公共空間は，現時点においてイヌの同伴が完全には認められていない 4 つの場面（飲食店，スーパーマーケット，電車，航空機）を選択した。イヌは状態（ケース・カートに入れられている，リードにつながれている）とサイズ（小型犬，大型犬）が異なる 4 種類に加えて，対照条件として全ての場面での同伴が認められている「リードにつながれた盲導犬」を選択した（例：飛行機内に「リードにつながれた大型犬」がいた場合，あなたはどの程度受け入れられますか。航空会社の許可は得られているものとします）。さらに個人特性を把握するため，回答者の性別，年齢，居住地域，イヌの飼育経験（飼育環境，飼育犬種），イヌに対する好悪感，パーソナリティ特性（TIPI-J; 小塩他 2012）について回答を求めた。

結果

イヌの飼育経験者 150 名（男性 79 名，女性 70 名，その他性別 1 名，平均年齢 37.83 歳），および非飼育経験者 150 名（男性 58 名，女性 91 名，その他性別 1 名，平均年齢 45.99 歳）の計 300 名から回答を得ることができた。それら全てのデータを分析対象とした。

全般的な社会受容度　場面およびイヌの種類ごとに平均社会受容度を算出した（表 1）。盲導犬はどの場面においても社会受容度が高かった。場面（4）×イヌの種類（4；盲導犬除く）の 2 要因の分散分析を実施した結果，交互作用が有意であった（$F(9,2691) = 17.74$，$p < .001$）。社会受容度はリードにつないだ状態よりもケース・カートに入った状態で高く，同じ状

* 連絡先：inose@nvlu.ac.jp

表 1　各条件における平均社会受容度（5 段階評価）

場面	リードにつないだ盲導犬(対照条件)	ケース・カートに入った小型犬	ケース・カートに入った大型犬	リードにつないだ小型犬	リードにつないだ大型犬
飲食店	4.59	3.96	3.62	3.58	3.30
スーパー	4.65	3.75	3.35	3.17	2.95
電車	4.67	3.92	3.47	3.02	2.76
航空機	4.60	3.65	3.35	3.05	2.75

態であれば大型犬よりも小型犬で高かった。場面については飲食店で比較的高く，航空機内で低かった。特に航空機内や電車内ではケースやカートに入っていないと受容されにくい傾向があった。

個人特性との関連性　盲導犬を除く全条件の平均社会受容度を算出し，個人特性との関連性について分析した。回答者の性別や年齢，居住地域による社会受容度の違いは認められなかった。イヌの飼育経験がある回答者は，飼育経験がない回答者よりも社会受容度が高かった（飼育経験あり＝3.62，飼育経験なし＝3.10；$t(298)=4.03$，$p<.001$）。また，イヌを好ましいと思っている回答者ほど社会受容度が高くなっていた（相関係数 $r=.40$，$p<.001$）。社会受容度と回答者のパーソナリティ特性との関連性は見いだせなかった。

考察

調査の結果，イヌに対する社会受容度は飲食店で高く，航空機内で低いことが明らかになった。特に，航空機や電車といった移動制限を伴う閉鎖的空間においては，イヌをケースやカートに収容することが求められている。一方，盲導犬に関してはいずれの場面においても社会的に受け入れられていた。個人特性との関係については，イヌの飼育経験やイヌに対する好意的感情によって社会受容度が高くなっていた。公共空間にイヌが入ることの受容には個人差が存在するため，同伴可能な空間を区分けする等の配慮が必要であろう。

利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

文献

小塩真司，阿部晋吾，カトローニ・ビノ．2012．日本語版 Ten Item Personality Inventory（TIPI-J）作成の試み．パーソナリティ研究，21，40-52.

動物介在教育・療法学雑誌投稿規程（2024.4.17）

（Journal of Animal-Assisted Education and Therapy，略称 J. Anim. Edu. Ther.）

1. 動物介在教育・療法学雑誌 Journal of Animal-Assisted Education and Therapy（略称 J. Anim. Edu. Ther.）は，ヒトの健康増進および QOL（Quality of Life）の向上，教育あるいは心身の不都合を改善する等の目的で動物を介在させた効果やその手法等に関する内容，ならびに介在動物の健康や飼養の基準等に関する，基礎的・応用的な内容を掲載する英文あるいは和文学術雑誌で，当該領域の発展に寄与することを目的とする。前述のような目的を設定しない動物による活動や，上記に該当しない飼い主と動物との関係等の報告に関する内容は含まないものとする。本誌に投稿される論文はその内容が未発表かつ未投稿で独創的な知見を含み，さらに，内容を十分に理解できるネイティブスピーカーによって英文チェックを受けたものに限る。投稿者は会員に限る。ただし，共同研究者は会員以外でも差支えない。なお，すべての投稿論文は編集委員および複数の審査員により採否を決定する。
2. 投稿者は投稿論文内容や手続き全般において人権の尊重と福祉に充分配慮し，得られた情報に関して保護する責任を有するもので，かつまた研究に活用された動物は「動物の愛護および管理に関する法律」を遵守した条件下で飼育管理され，動物の福祉に配慮したものであり，そして当該論文がこれらに従って実施された旨を本文中に明記すること。
3. 論文は当学会のホームページ（http://asaet.org/）上に公開する形式をもって公表する。したがって，投稿論文内容は一般公開を前提とし，人権に配慮した内容であること，投稿をもって公開の許諾および著作権譲渡に同意したこととする。
4. 論文の種類は，以下のとおりとする。
   (1) 原著（Original Article）：独創的研究によって得られた新知見を含む論文とする。
   (2) 短報（Short Report）/ 事例報告（Case Report）：公表する価値は十分あるものの原著としてはデータ的に不十分な研究成果，十分な考察や意義づけはできないが興味深い事例，ネガティブデータだが学術的に意味があると思われる知見などの論文とする。
      ＊投稿論文については編集委員会にて受付採否を決定し，受付けされた投稿論文に対して査読を行なうものとする。
   (3) 総説（Review, Mini-review）：編集委員会が執筆を依頼する。興味深い最新の知見を全般的に紹介するものを Review とし，主として著者らの最近の研究を紹介するものを Mini-review とする。
   (4) 特集（Topics）/ 講演論文（Lecture）：本機関紙には上記論文種のほかに，学術総会でのシンポジウムなど，特に会員相互の知識や意識の共有に有用であると編集委員会が認めた内容を掲載する。
   (5) 動物介在教育・療法学会学術大会発表要旨：学術大会の予稿集を巻末に掲載する。
5. 論文は表題や図表がない場合１ページあたり英文でおよそ 4000 字，和文でおよそ 2000 字とし，

刷り上がりが原著は 10 ページ以内とする。Review はページ数を制限しない。規定のページ数を超えた場合，超過分の編集代は著者負担とする。論文は原則，電子メールによる受付とする。

6. 投稿原稿は A4 版に上下左右に十分な余白を取り，1 ページ 40 文字 24 ～ 26 行（およそ 1000 字），記述する。
7. 原稿の第 1 ページ（表題ページ）に日本語と英語の両方で，表題，著者名，所属機関名，論文種，running title（スペースも含めて 70 文字以内）を記す。次いで日本語で連絡者の氏名，所属機関および住所，電話番号，E-mail アドレス（必須）を記載し，さらに英文チェックを受けたネイティブスピーカーの氏名（または会社名）および住所を記入する。
8. 第 2 ページに英文および和文の Abstract/ 要約（原著および Review では和文 500 単語以内・英文 250 単語以内，短報および Mini-review では和文 250 単語以内・英文 125 単語以内）および 3 ～ 6 語の Key words/ キーワードを記す。英文論文・和文論文を問わず，英文と和文の両方を記すこと。
9. 第 3 ページ以後の記述の順序は，Introduction，Materials and Methods，Results，Discussion，Acknowledgments，Conflicts of Interest（利益相反：後述）および References の順序で本文を記述する。Results と Discussion をまとめて Results and Discussion として記述してもよい。
10. 略語は初出時に一旦スペルアウトし，その直後に略語を（　）内に示し，以下その略語を用いる。括弧は和文の場合は全角、英文の場合は半角を用いるものとする。
11. 数字は算用数字を用い，度量衡の単位および略語は次のように使用する。
cm，mL，g，hr，min，sec，SD，SE，℃など。
12. 固有名詞は最初の文字を除いては小文字とし，動植物名の学名はイタリック表記とする。
13. 図・表・写真は必要最小限にすること。図表はパワーポイントやエクセル等の別ファイルに作成したものとする。図表の番号は一連の通し番号をつけ（例，Table 1.），注釈も挿入し，図表および写真の挿入箇所を本文中に指定すること。写真は jpg の原版であること。
14. 引用文献は，本文中に著者および年号を（　）に記す；英文では（Higuchi 2008）または（Higuchi and Matoba 2008）とし著者名と年号の間にはスペースを入れる，和文では（樋口 2008）または（樋口・的場 2008）とし著者名と年号の間にはスペースは入れない。本文中の引用文献で著者が 3 名以上の場合，引用文献中で区別の付く限りにおいて，筆頭著者のみを表示する；英文では（Higuchi *et al* 2008）とし著者名と年号の間にスペースを入れる，和文では（樋口他 2008）とし著者名と年号の間にはスペースは入れない。引用文献を複数列挙するときは文献と文献の間に「；」を付ける；英文では（Higuchi 2008; Higuchi and Matoba 2008），和文では（樋口 2008；樋口・的場 2008）。末尾の引用文献リストは著者のアルファベット順に示す。記載順序は雑誌の場合は，「著者氏名．年号．論文名．雑誌名，巻，頁.」とする。英文著者の名前のイニシャルに「.」は付けない。雑誌名は省略しない。単行本の場合は「著者氏名．年号．論文名．引用頁，書名，編著者名，発行所，所在都市名.」とする。Web からの引用の場合，著者名（あるいはサイトの運営主体），Web ページのタイトル，URL（最終閲覧年月日）とする。

《例：雑誌》

慶野宏臣，慶野裕美，川喜田健司，美和千尋，舟橋　厚．2008．広汎性発達障害のある子どもたちに乗馬活動することによる療育支援効果発現とその経過．ヒトと動物の関係学会誌，20，74-81.

Kakinuma M, Hamano S, Hatakeyama H, Tsuchida A. 2006. A comparison of captive chimpanzee mother's and adult daughter's maternal behavior. The Bulletin of the Nippon Veterinary and Life Science University, 55, 52-60.

《例：単行本》

安藤孝敏．2003．人とペットの関係を評価する尺度．pp.166-183,「人と動物の関係」の学び方，桜井富士朗・長田久雄編著，インターズー，東京都.

《例：Web からの資料》

環境省．2009．平成 21 年度　動物の遺棄・虐待事例等調査報告書．http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h2203/full.pdf（最終閲覧日平成 27 年 2 月 27 日）

15.　Conflicts of Interest（利益相反）について

動物介在教育・療法学雑誌は動物をヒトの生活，教育，福祉，そして医療等に計画的に役立てる学術領域における研究成果・調査の成果を発表する場である。研究者が他の企業・法人組織または営利を目的とした団体と経済的な関係を持つときに不適切な利益相反行為が発生する可能性がある。不適切な利益相反行為が生じた場合データの客観性は歪められ，結果として社会的不利益が生じることになり，本学会はこれを避けなければならない。そのため，著者は，投稿内容の研究結果について，個人的，財政的，または潜在的な利益相反に関する有無を，下記の例示のように開示しなければならない。

《例：COI に当たらない場合》

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

The authors state there are no conflicts of interest.

《例：COI に該当する場合》

本論文のための研究に○○株式会社から資金援助を受け，製品開発につながる可能性がある。著者は，これら利益を動物介在教育・療法学会編集委員会にすべて開示している。

This research is sponsored by company ○○ and may lead to the development of products, in which I have a business and/or financial interest. I have disclosed those interests fully to J. Anim. Edu. Ther. Committee.

16.　本誌に掲載された論文の著作権は特定非営利活動法人　動物介在教育・療法学会に帰属するものとする。転載時にはその都度本編集部の許可を必要とする。ただし，論文の内容に関する責任は著者が負うものとする。

17.　原稿はいずれも PDF 変換したものを下記の送付先に電子メールにて投稿する。原稿が受理された段階で，再度マイクロソフト　ワードファイルにて提出する。図表の場合パワーポイントおよびエクセルとする。ソフトのバージョンや互換性等の関係からフォーマットが崩れたり文字化けが生

じた場合は，原稿を印刷したものを１部編集委員会事務局まで送付するよう依頼する場合がある。

18.　その他

著者校正は１回とするが，誤植のみの訂正とし，追加や書き改めは認めない。

19.　投稿ならびに問い合わせ

〒180-8602　東京都武蔵野市境南町 1-7-1

日本獣医生命科学大学　比較発達心理学研究室

野瀬　出

電子メールアドレス：inose@nvlu.ac.jp

特定非営利活動法人　動物介在教育・療法学会

理　事　長　　土田　あさみ（元東京農業大学）
副 理 事 長　　安藤　孝敏　（ヤマザキ動物看護大学）
　　野瀬　出　　（日本獣医生命科学大学）
事務局長　　森　茂樹
理事（五十音順）
　絢野　那陳（南高愛隣会ホースセラピー研究センター）
　押野　修司（埼玉県立大学）
　柿沼　美紀（日本獣医生命科学大学）
　亀井　曉子（静岡文化芸術大学）
　倉恒　弘彦（大阪大学）
　佐野　葉子（東京福祉大学）
　生野　佐織（日本獣医生命科学大学）
　土田　浩生　（川田医院）
　中川　美和子（ヨナグニウマ保護活用協会）
　畑　孝　　（いぐさ動物病院）
　濱野　佐代子（日本獣医生命科学大学）
　古川　勝也　（山口県職員）
　八城　薫　　（大妻女子大学）
　安野　舞子　（横浜国立大学）
監　　事　　渡辺　昭代　（かわさき高齢者とペットの問題研究会）

動物介在教育・療法学雑誌
編集委員会

委　員　長　　野瀬　出　　（日本獣医生命科学大学）
副 委 員 長　　八城　薫　　（大妻女子大学）
委員（五十音順）　安藤　孝敏　（ヤマザキ動物看護大学）
　　押野　修司　（埼玉県立大学）
　　佐野　葉子　（東京福祉大学）
　　生野　佐織　（日本獣医生命科学大学）
　　局　博一　　（東京大学）

動物介在教育・療法学雑誌　第 16 巻

令和 7 年 6 月 30 日　発行

編集者　動物介在教育・療法学雑誌　編集委員会
発行者　特定非営利活動法人　動物介在教育・療法学会
発行所　特定非営利活動法人　動物介在教育・療法学会
〒 210-0844　神奈川県川崎市川崎区渡田新町 1-6-10
Tel　044-272-8421　Fax　044-272-6041
E-mail：office@asaet.org

印刷所　ソウブン・ドットコム株式会社
〒 116-0011　東京都荒川区西尾久 7-12-16
Tel　03-3893-0111

複写をご希望の方へ

特定非営利活動法人動物介在教育・療法学会は，複写複製および転載複製に係る著作権を学術著作権協会に委託しています。当該利用をご希望の方は，学術著作権協会（https://www.jaacc.org/）が提供している複製利用許諾システムもしくは転載許諾システムを通じて申請ください。但し，企業等法人による社内利用目的の複写については，当該企業等法人が社団法人日本複写権センター（(一社)学術著作権協会が社内利用目的複写に関する権利を再委託している団体）と包括複写許諾契約を締結している場合にあっては，その必要はございません（社外頒布目的の複写については，許諾が必要です)。

権利委託先　一般社団法人学術著作権協会
〒107-0052　東京都港区赤坂 9-6-41　乃木坂ビル 3F
Fax：03-3475-5619　　E-mail：info@jaacc.jp

複写複製および転載複製以外の許諾（著作物の翻訳等）に関しては，(一社)学術著作権協会に委託致しておりません。直接，特定非営利活動法人動物介在教育・療法学会へお問い合わせください。

Reprographic Reproduction outside Japan

Asian Society for Animal-assisted Education and Therapy authorized Japan Academic Association For Copyright Clearance (JAC) to license our reproduction rights and reuse rights of copyrighted works. If you wish to obtain permissions of these rights in the countries or regions outside Japan, please refer to the homepage of JAC (http://www.jaacc.org/en/) and confirm appropriate organizations to request permission.

PDF ファイルをご覧いただくには，Adobe Reader が必要です。
Adobe Reader is necessary to read this PDF file.